第三章　大詰めの天草測量

天草上島を二手に分かれて測量してきた一行は、合津村で合流し、残りの上島測量に引き続き、天草最後となる御所浦島測量をすることになる。

46日目　12月1日（十一月五日）

測地・合津村（上天草市松島町）
泊地・合津村（上天草市松島町）

《測》前夜より雨。6時頃止む

7時、青木、永井、上田、箱田、長蔵、一手になり測量。

合津村前島一周（3・8㎞）、池島一周（872m）、池島より小島間（46m）、小島半周（103m）、小島・二ノ池島間（31m）、二ノ池島一周（1・0㎞）、仏島一周（713m）、ウソ島一周（688m）。合計7・3㎞。

17時帰宿。前夜同宿。

《巡》曇天。天文観測無し。

今日伊能様、坂部様、代官様休足。青木様、永井様その他弟子衆で測量に出立。合津村の島々の測量を終え、15時過ぎ帰宅。

《巡・坂部》曇天。東風。

6時まで雨。7時頃より止んだので、伊能様、坂部様休みになるが、青木様、永井様、箱田様、上田様島々の測量に出る。付添は酒井、橋口両人。伊能様附き庄屋は残らず病気。

栖本組、本戸組、井手組、志岐組大庄屋、下河内村庄屋、中田村庄屋へ、御所浦村に暇乞いに行くように、代官様の仰せを以て飛脚を立てる。

伊能様、内弟子衆、竿取二人宿・役座

下河辺様宿・庵

代官様宿・御座（「御座は真宗の布教所か」との注釈）

付添宿・隠宅

〆　これは伊能様付廻り日記による

下河辺様九月廿九日（10月27日）より痢病のためお休みとの話が付添中よりある。今だ全快していないとの事。

合津村の前島、池島、小島、仏島、ウソ島を測量し、16時頃帰宿。
合津村にて96銭２文、筆者登士助より請取７００文を竿取小六より竿取平助殿へ渡す。この訳は庄九郎が存じている。
（時刻が三者三様違うが、大体で時刻を計っている証さか）
代官宿は御座となっているが、前日は甚助宅となっている。当日代官は休息しており、宿を変えたとは思えない。

《木山家文書》
態以飛脚得御意候　然者御測量方茂明日迄大矢野組相済明後七日御所浦村御渡海右一村相済候上肥後御領分江御差入ニ御座候間一組ゟ大庄屋庄屋壱人宛御暇乞ニ罷出候様御代官様ゟ被仰聞候間十日迄御所浦村へ御着之積リニ而御出浮可被成候　十一日ニ者肥後地江御渡海御座候間右日限無間違庄屋御同道御出役可被成候以上
十一月五日　　附廻り　大庄屋
辰刻　　合津村ゟ
木山十兵衛殿
此状本紙ハ八日夜楠浦村へ遣
右同村出勤候様申遣ス

御暇乞い

《巡廻日記》《木山家文書》にあるように、御所浦を最後に天草の測量を終える伊能忠敬に、御暇乞いをするよう、付添代官から郡内の各組に達しの飛脚が出された。
ここで、不可解というには大げさだが、不思議に思うのは、十組一町のうち、出されたのは、栖本、本戸、井手、志岐の四組。更に特例的に下河内村庄屋、中田村庄屋が入っていることだ。（巡廻日記）これには、忠敬が会いたいということで、代官に要請したことなのだろうか。それとも、別の意味があるのか。ただし、木山家文書には「一組ゟ大庄屋庄屋壱人宛」となっており、全組に出されている。
また、木山家文書では、木山大庄屋より（本戸組代表として）楠浦村庄屋へ、御所浦へ出向くよう指示（要請）しているが、何らかの都合があったのか、結局は、大庄屋本人が、町山口村庄屋と共に暇乞いに来ている。
また、指令があったのに出向いていないのには、当時の通信事情があったのかもしれない。江戸時代、辺鄙な天草と云えども、宜珍日記に見るように、そこそこかなりの飛

脚制度ができていたようだが、現在のように、即時通信はなく、伝達がうまくいかなかったことも考えられる。また、御所浦まで行くとして、今日とは比較にならな交通状況。行くに行けない御所浦島。いや、天草自体が離島そのものであった。

その中で、結局御暇乞いに参上したのは（巡廻日記）。

大矢野組　内野河内村庄屋　岡部新左衛門
（但し教良木村へ）
一町田組　中田村庄屋　大堂作右衛門
冨岡町　年寄　村川彦八郎
本戸組　本戸馬場村大庄屋　木山十兵衛
同　町山口村庄屋　大谷小十郎
栖本組　赤崎村庄屋　北野記十郎
同　須子村庄屋　落合元兵衛
御領組　下河内村庄屋　佐藤弥右衛門

47日目　12月2日（十一月六日）

測地・合津村、教良木村（上天草市松島町）
楠甫村（天草市有明町）
泊地・【伊能隊】楠甫村（天草市有明町）

【坂部隊】教良木村（上天草市松島町）

《測》朝曇天。
六時前、合津村出発。

【伊能隊】伊能、上田、箱田、長蔵。
合津村観音平より始める。同村樋蔵引まで測り、坂部隊の始点に繋げる（３・３㎞）。
また、楠甫村高札前に残した印より横切り、登屋まで測る１・９㎞。合計４・６㎞）。
15時楠甫村へ引き返し止宿。
宿・旧庄屋高木七左衛門。（同村は大矢野吉田長平兼帯。当時年寄浅右衛門、儀右衛門引請）。

【坂部隊】坂部、青木、永井、平助。
合津村樋蔵引より始める。折尾、先日打ち止の梵天まで測る（３・５㎞）。他に口細入江を半測（３２１ｍ）。
宿・教良木村庄屋植村嘉左衛門。

《巡》晴天。夜分天文観測無し。
伊能様５時出発。合津村海辺通りを測量。観音平よりなけあけの鼻まで済む。楠甫村へ13時ころ着く。それ

より教良木境まで測量のつもり。
坂部様同刻出発。教良木横切へ向かう。
下河辺様は今日合津村より乗船し御所浦へ行く。
伊能様宿・楠甫村庄屋宅。
代官様宿・同村九蔵宅。
郡中付添宿・同村浅右衛門宅。
今晩富岡会所郡方から調物が送ってくる。また役所代官より渡辺敬助様へ送り物の紙包み来る。

《巡・坂部》晴天。北東の風。
5時合津村出発。ひそふひき鼻(現ひそふき鼻)より合津内蛤潟折尾に残した梵天まで測量。教良木星平で昼食。それより山越えで教良木へ泊まり。
三人上下竿取宿・役座。
付添宿・霊光寺。
郡中竿取宿・(記載なし)
竿取平助殿への明け荷が、合津村より教良木村へ参るはずの処、楠甫へ着いたため、合津村の荷物宰領が飛船で楠甫に行き、早々に教良木村へ持ち送る。
合津村観音鼻よりひぞふひき鼻まで伊能様測量。ひぞふひき鼻より残した梵天まで坂部様手合いで測量の筈であったが、案内者の不案内で蛤潟という所より測量が出来なかった。ひぞふひきには印がなかったとはいえ、地元と測量隊に齟齬があり、その間は、後日に残し、結局翌七日(12月3日)に、伊能様内弟子によって測量が済む。
内野河内村庄屋伺いに来てその夜帰る。
合津村庄屋が、同村の未測量か所へ案内のため来る。
伊能様は案内無しのため、教良木に行く。教良木村の庄屋見習い(太田氏)八重次が案内に来るということを合津庄屋より伝えられる。

宜珍の巡廻日記は、坂部隊付きの日記も付けられている。坂部隊付きの記録者は、宜珍以上に事細かく、様子を記録している。それは、坂部隊付きの記録者が、几帳面な人であったことがよく分かる。と同時に、宜珍の近辺に、当時として、これだけの能力者が居たことを物語っている。
ただし、翻刻文とはいえ、解訳文でないので、意味を解するのに四苦八苦。もし、この本書と原文(翻刻文)とを比較して、間違いがあれば指摘してほしい。

この文を読むと、伊能測量に対して、現地の協力が如何に重要であったかということが、理解できよう。

伊能測量隊直属の隊員は、16名であったが、この測量がこの人数だけでは、決して為し得なかったことが、この宜珍の巡廻日記を読むと明らかになる。

忠敬の測量日記だけでは分からない、サポートの重要性がこの宜珍巡廻日記でよく分かる。

48日目　12月3日(十一月七日)

測地・合津村、教良木村、今泉村、姫浦村
(上天草市松島町)
楠甫村、内野河内村(天草市有明町)
泊地・御所浦村(上天草市御所浦町)

《測》朝晴れ曇。

【伊能隊】伊能、上田、箱田、長蔵。

6時頃楠甫村出発。昨日測り止めした楠甫村登尾より始める。(上田は昨日坂部隊終わり、伊能隊始め、所違いにより渡辺敬助を派遣し、再測を成す)、峰、それより教良木村野々川、小路、坂部隊初めの㊥印迄測る(2・8㎞)。

それより大平、黒仁田、草積峠(村界、外に同名あり)、浦村中原、名桐、松尾(頭百姓源太方にて昼食)、原、十月二十二日残印に繋ぐ(6・4㎞。合計9・1㎞)。仕越し共楠甫村より浦村まで11㎞(則、横切り測11・9㎞)。それより乗船御所浦へ15時に着く。

【坂部隊】坂部、青木、永井、平助。

教良木村小路㊥印より始める。下教良木、それより内野河内村下、舟蔵、姫浦村(庄屋浦本十左衛門前、十月晦日残印に繋ぐ)まで横切り測(十月晦日測と合わせ、6・5㎞)。合計6・9㎞。

それより乗船、14時頃御所浦着。

本陣・御所浦村庄屋福島丹治。

別宿・百姓三太夫。

下河辺宿・庄屋後見勝太夫。

此の夜曇り、天文測量無し。

《巡》今晩曇で天文測量は出来なかったが遅くに晴れたため実施。

弟子衆両人と代官様によって、昨日に残した合津今泉海辺を測量。

伊能様は楠甫、教良木境まで測量。梵天より教良木通

り浦村まで横断測量。5時頃出発、教良木にて小休止。浦村松尾の丈右衛門宅にて昼食。それより乗船し、御所浦へ15時頃着船。

坂部様手合い（青木様、永井様も）は、少し先に着く。

坂部様隊宿・安太郎宅。

下河辺様宿・後見光右衛門方

伊能様宿・役座。

代官様宿・長太郎。

江戸竿取衆宿・菊蔵。

郡中大庄屋宿・順左衛門。

郡中庄屋宿・九郎次。

郡中竿取宿・作弥。

八代より聞き合役人が御所浦へ来て、すぐに帰る。

《巡・坂部附き》曇天。北風時々晴れる。

5時頃教良木村出発。姫浦へ横切り。内野河内村役座で小休止。姫浦役座にて昼食。それより船で御所浦へ渡海。15時に着く。

三人上下宿・安太郎。

付添宿・順蔵宅。

郡中竿取宿・弥作宅。

中田村庄屋出伺い。

昼食、宿について、伊能日記、巡廻日記、坂部附き巡廻日記で食い違っている。

伊能隊の昼食は、伊能日記では、頭百姓源太方、巡廻日記では丈右衛門となっている。

また坂部宿が、伊能日記では三太夫、巡廻日記と坂部附き巡廻日記では安太郎となっている。また下河辺宿は、伊能日記では勝太夫、巡廻日記では光右衛門となっている。さらに、巡廻日記と坂部附き巡廻日記でも違いがみられる。郡中庄屋（付添）宿は九郎次と順蔵、郡中竿取宿が作弥と弥作。　また天文測量も、測量日記では無し、巡廻日記では『今晩曇ニ而天文無之遅ク晴レ候故天文相済』と記されている。

若干記録者によって混乱しているようだ。

49日目　12月4日（十一月八日）

測地・測量無し

泊地・御所浦村（天草市御所浦町）

《測》朝より雨。午後まで降る。それより夜まで曇る。

《巡》雨天のため測量は中止となる。終日雨降る。
附き廻り代官様より測量方役人にカラスミを差し上げたが受け取られなかった。もっとも、最初伊能様は受け取られたが、坂部様が辞退されたので、伊能様もお返しになった。
大堂作右衛門（中田村庄屋）今日御所浦迄出勤。

《巡・坂部附き》
米の件で富岡会所に飛脚を出す。
役人様方への進物を調えるため久玉へ飛船を出す。
井手へ飛脚を出す。

贈り物

この日の巡廻日記には、興味深いことが書かれている。それは、翻刻原文によると。

「附廻御代官様ゟ測量方御役人衆中鰡子御上被遊候得共御請無之　尤最初伊能様江御上被成候処御請取之処　坂部様御請無ニ付伊能様も御返ニ相成」

つまり、附廻りの代官より、餞別として測量方役人衆にカラスミを差し上げたところ、受け取りにならなかった。しかし最初は伊能様は受け取られたが、坂部様が受け取らなかったので、伊能様も御返しになった、というものである。

カラスミ（唐墨、鰡子、鱲子）は、ボラの卵巣を塩漬けし、塩抜き後、天日干しで乾燥させたもの。名前の由来は形状が中国伝来の墨「唐墨」に似ていたため。（ウィキペディア）

カラスミは現在天草では牛深で作られている。某商店のウエブページを見ると、１００g前後で６千円、１９０g前後で１万５千円となかなか高価である。

このカラスミ事件？の場面を、北野典夫氏は『大和心を人問わば』で次のように著している。

いよいよお別れである。伊能忠敬の測量隊は、天草に大きな足跡を残して去っていく。残される者たちは、この偉大な人物への敬仰の意をつのらせ、別離の情を深くしていた。

附き廻りのお代官渡辺敬助が、餞別に天草名産の鱲子（からすみ）を贈った。

「これはこれは……」

伊能忠敬が有難く頂戴する。しかし、坂部貞兵衛は、固辞して受けない。忠敬先生、まことに調子が悪い。

「どうもこれは……、それでは拙者も、お志だけお受けすることにして。」

忠敬先生、返品を余儀なくされた。「坂部貞兵衛の頑固一徹、そこがまた同人の良いところであろうが」

忠敬先生、まことに具合が悪い。十一月八日、御所浦でのちょっとした挿話である。

果たして坂部は真面目な性格で、賄賂等でなくお礼の品とはいえ、受け取らなかったのか。

現在では、役人に品物や金品を贈ったり、また役人が貰ったら贈収賄などの罪に問われかねないが、当時はそんな法律はなかったし、ごく普通のことであった。

こういう土産物は、ここ天草だけでなく、別の地でもあったと思われるので、他の地の忠敬の測量日記を見てみると。

九月二日、三日の別記に(相良候より贈物あり)と記されている。相良候とは、肥後人吉藩主のことである。この人吉を測量したのは坂部隊であった。

ただ、別記としているが、その別記は見当たらない。

そして、天草測量を終えた十一月十四日に、「此日、人吉東与治右衛門来、相良候より贈物あり。我等へ煎茶十斤一箱。下河辺、永井へ煎茶六斤一箱宛。沢次、平助へ煎茶三袋宛。僕(しもべ)三人へ茶弐袋宛、被送之。受納」と記している。

また翌日の十五日には、「八ツ後、人吉城下着。(暮七ツ後雨止む)。止宿客館。此夜郡奉行丸目八左衛門、相良候使者を兼挨拶に出る。贈物あり。我等へ毛木綿三反。下河辺、永井へ毛木綿二反宛。沢次、平助へ木綿へ二反宛。僕三人へ木綿一反宛被送之。受納」と記している。

天草測量を終え、伊能隊は、佐敷町(現芦北町)から人吉へ、坂部隊は植柳村(現八代市)を測量中であった。これは、先に坂部隊が人吉に入った時、人吉藩から坂部へ贈物をしたが、坂部が受け取らなかったので(前記の北野説にたつと)、後日伊能へ贈ったのかもしれない。伊能は、これをありがたく受け取っている。

しかし筆者が察するに、坂部が真面目ゆえに受けとらなかったという北野説ではなく、贈物はあくまで隊長の伊能忠敬が受けるものとのことからではなかったか。

あるいは坂部も受け取っているのか、不明である。

ところで、伊能忠敬が、芦北から人吉へ入ったのは、どんな意味があるのか、ちょっと不可解である。もちろん、測量のためではあるが、測量したのは、芦北佐敷から、山

越えして、球泉洞がある大瀬まで。それから測量せずに人吉へ行き、その後一気に球磨川を船で下り八代へ行っている。この球磨川沿いは、先に坂部隊で測量している。相良候から贈物があったので、わざわざ挨拶に出向いたのだろうか。

前後する（五月八日）が、宮崎から鹿児島（志布志）に入った時点で、伊能・坂部へ泡盛一壺、国分刻煙草二包宛を始め、小者に至るまで、贈物を受けている。この時の贈り物は、小者の分を除いて、江戸へ届けるように依頼している。

この贈物、測量日記には、度々出てくる。そのたび、坂部さんも受け取っているようなのに、天草では受けなかったのは、なんでだろうか。

その他の贈物について『第七次測量」全般について調べてみた。

その中で特徴的なものをあげてみると。

① 贈物をする側は各地一様でなく、一般的に贈り物は無いか少ない。

② ただし、現在の大分県、宮崎県の測量においては、連日のように贈物があっている。これは、大分県には８藩が分立し、さらに肥前、肥後、島原藩の飛地があったため、まるで競争するかのようだ。そして、それは全て受領しているが、辞退しているのがある。一般に送り主は領主であるが、辞退した送り主は奉行や神主、そして代官であったためのようだ。

つまり天草で贈物をしたのは、代官であり、しかも、島原藩預かりとはいえ天領であったため、坂部さんは遠慮したのかもしれない。つまり。真面目から辞退したというのは、北野氏の誤りであるようだ。ただし、薩摩測量終了時、藩主と同時に付き添いの野元嘉三次からも、元平鍛の差小刀を伊能と坂部へ贈られ、受け取っているようだ。例外もあるとみるべきか。

因みに、「第七次測量記」に記載されている贈与を記してみると。（見過ごしもあるかも）

（月日　測量地　贈り主　受断　）

文化六年

八月二十七日　江戸出発

文化七年

正月　　十日　　豊後・臼杵藩主　　受領

正月二十一日　　豊前・中津藩主　　受領

正月二十二日	豊前・中津藩主	受領
正月二十三日	豊前中津藩・郡奉行	辞退
正月二十四日	豊前・中津藩主	受領
正月二十六日	肥前・島原藩主	受領
正月二十八日	日向・延岡藩主　受領一売払い	
正月二十八日	日向・延岡藩主	受領
正月二十九日	豊後・杵築藩主	受領
二月　二日	旗本・松平氏	受領
二月　四日	豊後・佐伯藩主	受領
二月　八日	豊後・森藩主	受領
二月　九日	豊後・日出藩主	受領
二月　十二日	豊後・府内藩主	受領
二月　十三日	豊後・岡藩主	受領
二月　十三日	肥後・熊本藩主	受領
二月　二十日	豊後・臼杵藩主	受領
三月　八日	豊後・佐伯藩主	受領
三月二十六日	日向・延岡藩主	受領
三月二十七日	日向・飫肥（おび）藩主	受領
四月　六日	日向・延岡藩主	受領
四月　十日	日向・高鍋藩主	受領
四月　十四日	日向・佐土原藩主	受領
四月　十七日	日向・高鍋藩主	受領
四月　十八日	日向・佐土原藩主	受領
四月　十八日	日向・佐土原藩分家主	受領
四月二十二日	日向・飫肥藩主	受領
四月二十三日	日向・飫肥分家主	受領
四月二十七日	日向・飫肥藩主	受領
五月　一日	日向・高鍋藩主	受領
五月　八日	薩摩・薩摩藩主	受領
六月二十三日	薩摩・薩摩藩主	受領
八月　二十日	薩摩・薩摩藩主外	受領
十一月　八日	島原藩天草代官	辞退
（ただし、伊能日記には記載なし）		
十一月十四日	肥後・相良藩主	受領
十一月十五日	肥後・相良藩主	受領
十二月二十二日	日向・岡藩主	受領
文化八年		
正月　朔日	豊後・森藩主	受領
正月　三日	豊後・府内藩主	受領
正月　六日	豊後・日出藩主	受領
正月　六日	豊後・日出藩主	受領
正月　八日	豊後・宇佐神宮神主	辞退
正月　九日	豊前・中津藩主	受領
正月　十日	豊前・中津藩主	受領

正月　十六日　石見・津和野藩主　受領
二月　九日　石見・津和野藩主　受領
二月　十四日　石見・浜田藩主　受領
二月二十九日　出雲・広瀬藩主　受領
五月　八日　江戸帰着

いかに、豊前・豊後、日向が突出しているかが分かる。というより、それ以外ではほとんど贈り物はなされていない。記していないのかもしれないが。

余記だが、贈る方も、測量隊の身分・地位に応じて、贈物の数量や質にどれくらい差を付けたらいいのか、気を使ったという説もあり、かつ伊能からも差をつけて贈れと要求したとの説もある。

また、この贈物の種類は様々だが、これをそのまま受け取り、持ち運んでいたのでは、長持ちがいくらあっても足りない。そこで、一部は江戸送りもあったようだが、殆ど換金されたという。この換金が、下位者にとっては、そのまま旅費や小遣いになったという。

50日目　12月5日（十一月九日）

測地・御所浦村（天草市御所浦町）
泊地・御所浦村（天草市御所浦町）

《測》朝曇天。

先後手7時出発。

伊能隊・伊能、青木、上田、長蔵。

御所浦村人家下より始める。嵐口（あらくち）（人家あり）、田尻、十段迄測る（8・6㎞）。

外に赤島（前島）一周測（1・5㎞、外赤島間178m、合計10・3㎞）。

坂部隊・坂部、永井、箱田、平助。

御所浦村眉島（マユ）（前々は前島なり）一周測（1・9㎞）。

それより牧島へ渡り、瀬ノ場㊥印より始める。右山沿いに鳩ノ﨑（人家15軒あり）、立見（人家10軒）、長浜まで測る8・3㎞。合計10・1㎞）。

坂部隊15時、伊能隊15時30分帰宿。

此の夜、曇天。

《巡》西風烈し。

伊能様隊は御所浦役座より測量開始。

坂部様隊は眉島より測量始める。

昨日薩州へ幟立ての件で飛船を出す。

富岡町年寄村川彦八郎、町役人惣代に御所浦へ暇乞いに出勤する。
栖本組須子落合元兵衛、赤崎北野。
郡中里数帳面締めかかる。改め里数島々とも、郡中村々内見里数も写し置く。

《巡・坂部附き》曇り。北風
6時に眉島より測量始める。
村川彦八郎出伺い。
木山十兵衛、大谷小十郎で伺い。
佐藤弥右衛門出伺い。
木綿三反調えて御用織を拵える。代金38匁を庄九郎が出す。

51日目　12月6日(十一月十日)

測地・御所浦村(天草市御所浦町)
泊地・御所浦村(天草市御所浦町)

《測》朝曇り晴れ。
先後手とも六時頃出発。

【伊能隊】伊能、永井、箱田、平助。
昨日測り止めした御所浦村十段より始める。懸詰まで測る(10・2㎞)。

【坂部隊】坂部、青木、上田、長蔵。
与一浦、横浦一島(2カ所に人家あり)一周測(5・5㎞)。それより牧島(昨日測り始め)瀬ノ場より始める。左山沿いに椛(カバ)ノ木(人家あり)迄測る(5・1㎞)。外に猿子島一周測(682m。合計11・3㎞)。
両隊とも16時頃帰宿。
此の夜曇天。

《巡》曇り。寒風。
伊能様隊は昨日の残り、梵天より測量。
坂部様隊は牧島に渡り測量。
本戸組大庄屋木山十兵衛、町山口村大谷小十郎、御暇乞いに出勤。

《巡・坂部附き》曇り。北風。
5時測量開始。
北野太十郎※、落合元兵衛出伺い。

《巡・坂部附き》の北野太十郎は、北野記十郎の誤記と思われる。『有明町史』にも、「上田源作の「御巡回日記」は、誤記して北野太十郎としているが、上津浦村庄屋脇山家から養子に来た記十郎に相違ない。」と記されている。

52日目　12月7日(十一月十一日)

測地・御所浦村(天草市御所浦町)
泊地・御所浦村(天草市御所浦町)

《測》朝曇天。

両隊とも六時頃出発。

【伊能隊】伊能、青木、上田、平助。

竹ヶ島一周測(５・０㎞)。外ヨンカ島、渡り２８９ｍ。五百島片側８２ｍ。

竹ヶ島内ヨンカ島（大平島）一周(９４０ｍ)、クンセ島一周(４０６ｍ、クンセ島、ヨンカ島間１２７ｍ)、葛籠島一周(６６７ｍ)測。それより昨日測り止めした懸詰より始め、大浦(人家)、今浦(人家)、元浦(人家)前まで測る(３・０㎞。合計１０・５㎞)。

【坂部隊】坂部、永井、箱田、長蔵。

牧島椛の木(人家15軒)より始める。田尻(人家２軒)、内形(人家１軒)、長浜、九日残印に繋ぐ(１０・７㎞)。外に片側〆他２０５ｍ、合計１０・９㎞。牧島総周２４・３㎞。

両隊とも17時に帰宿。

此の夜晴天、天文測量実施。

《巡》晴天。寒風。

伊能様隊は竹ノ島の測量を終え、本郷島の内昨日残りの梵天より元浦迄測量。それより帰宿。

坂部様隊は赤崎。

中田村へ預け置いた夜具入り長持３棹を取りに飛船を出す。12日朝船は帰る。

《巡・坂部附き》晴天。北風。

６時測量始まる。

23時肥後佐敷斗石村庄屋市平乗船の聞きあいに参る。

53日目　12月8日(十一月十二日)

測地・御所浦村(天草市御所浦町)

泊地・葦北郡佐敷町・八代

《測》朝曇天。

両隊とも6時頃出発。

【伊能隊】伊能、青木、箱田、長蔵。

御所浦村元浦より始める。唐木崎（人家あり）、御所浦本村人家下迄測る（4・7㎞）。

〈欄外・御所浦島周合計、26・5㎞〉。

御所浦一周終わり。

【坂部隊】坂部、永井、上田、平助。

黒島一周測（1・9㎞）・外に瓢箪島一周測（387m）。

両隊とも10時前に帰宿。

此の夜白雲小雨。

22時頃両隊とも御所浦島出発。

伊能、下河辺、永井、上田、平助。

肥後国葦北郡佐敷町へ向かうため乗船。

坂部、青木、上田、箱田、長蔵、（梁田は長持宰領）は同国八代郡八代へ向け乗船。

《巡》晴天

①昨日残りの分を10時頃に終わり、双方とも帰宿。

②郡中附き廻り大庄屋庄屋衆、御暇乞いのため罷り出る。

③御暇乞いの盃を上下残らず差し上げる。肴3種、吸い物2つ差し出す。

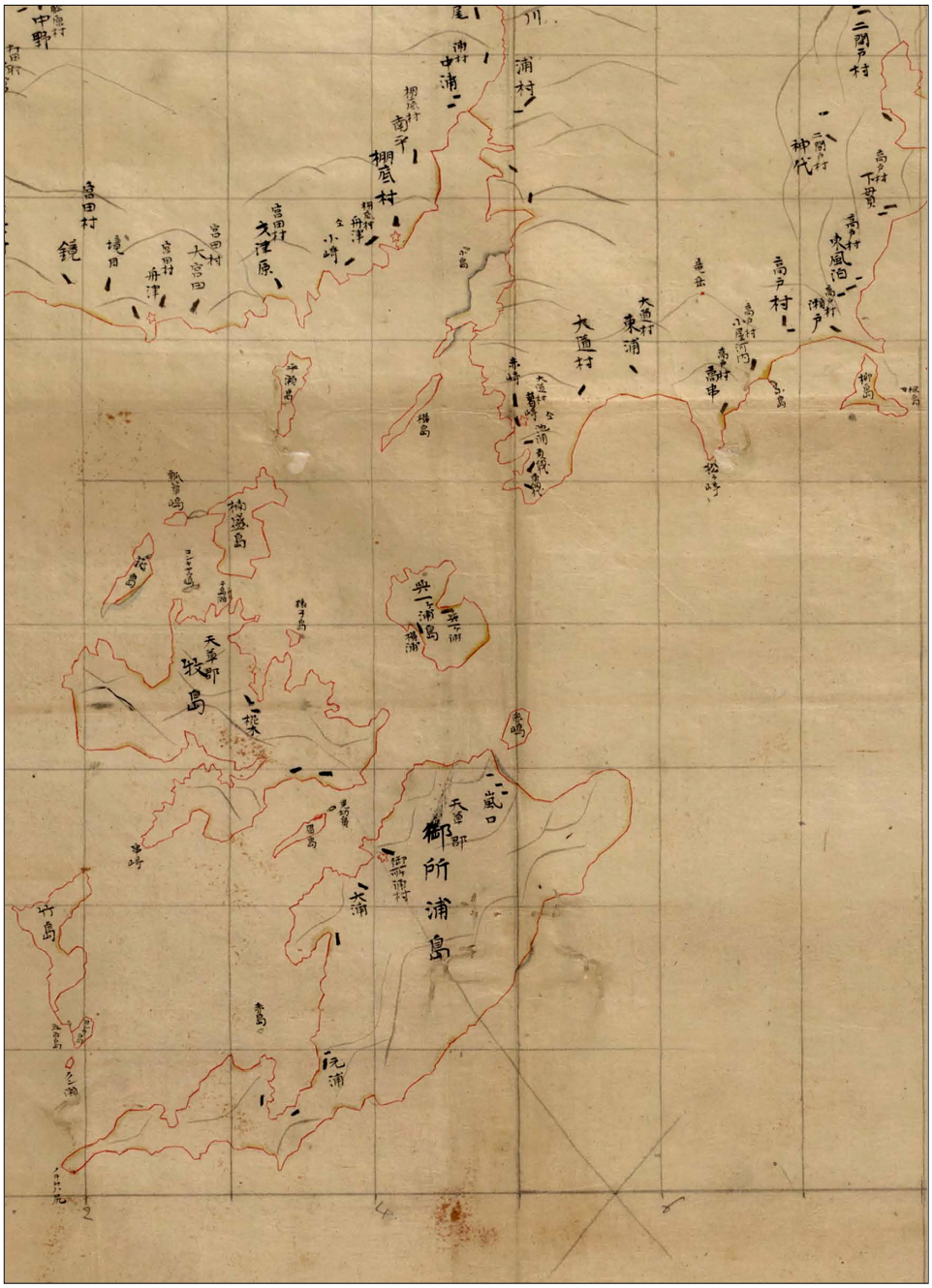
④今晩22時頃より乗船。砥岐組の村々より援船22艘が出る。

⑤伊能勘解由様は肥後佐敷へ渡海。付廻り代官、庄屋も見送りに佐敷迄渡海。2時頃佐敷へ着船。

⑥下河辺政五郎様、永井要助様も同船になる。

⑦附き廻り代官渡辺敬助様。高浜上田源作、中田大堂作右衛門、宮田中村清右衛門参る。荷物仕送りに竹四郎、東留風年寄鉄右衛門参る。

⑧坂部貞兵衛様は八代へ渡海。付廻り大庄屋吉田長平、酒井平太兵衛、橋口嘉左衛門、大谷小十郎。荷物仕送りに庄九郎、御朱印長持宰領に高戸の年寄新兵衛、船宰領に姫浦年寄治郎作参る。八代より吉田、酒井、橋口、大谷上下8人大矢野船より帰る。庄九郎、次郎作は後に残り、船中で使用された夜具などを御所浦へ積み帰る。



伊能大図　御所浦付近

提供　イノペディアをつくる会　伊能忠敬ｅ史料館

12月9日（十一月十三日）

《測》朝晴天。

【伊能隊】

8時頃肥後国葦北郡佐敷町（現葦北郡芦北町芦北）へ上がる。

天草総代庄屋上田源作、大堂作右衛門、中村清右衛門、島原御預所天草代官渡辺敬助送り来て帰る。

11時より同国救麻都（球磨郡）人吉城下へ向かう。佐敷町より横切り測。（以下略）

【坂部隊】

朝、肥後国八代郡八代城下へ着。止宿　一文字屋市左衛門（々十八日まで同宿）

《巡》晴れ　北風

①伊能様始めその外乗船。22時頃御所浦から乗り出す。同夜半佐敷口御番所前に着いたところ、同所惣庄屋伊藤丑助迎船の引き船67艘罷りこす。

朝7時ころ川入客屋下に着船、直ちに上陸。肥後領附き廻り池辺長十郎出迎える。宿亭主と見える者が麻上下（裃）にて平伏。路地より座敷に上がり落ち着かれたところで、代官渡辺敬助様、上田源作、中村清右衛門、大堂作右衛門一同、玄関より座敷に通り、御暇乞いの上引き取り、早速乗船し12時頃出帆、天草へ引き取る。中村清右衛門は組元の用向きで御所浦へ行く。

②渡辺敬助様は吉祥丸より才津（佐伊津）へ乗りつけ、上田源作、大堂作右衛門は浦村通い船で御領村へ乗りつける。同十四日富岡へ陸路で役所へ罷り出る。このたびの測量御用が滞りなく相勤めて引き取った趣旨を届け申し上げる。

53日間に及ぶ伊能忠敬の天草測量は、御所浦測量を最後に終わった。それにしても、御所浦測量最後の日の夜、次の測量地へ出帆。そしてその地に着くや否や測量を開始するという、あわただしさ。

また、測量隊に終始付き添った、付廻り一行も、無事終了することが出来、本当にご苦労さんでした。喜びと同時に、充実感も味わったことと思う。

以下《宜》

12月11日（十一月十五日）

曇　北風　朝のうち雨

測量方御用が相済、昨日富岡迄着く。　同所より船にて今晩帰る（高浜へ）。

12月31日（十二月六日）西風　曇り

久玉中原氏悔やみに立会い、才作代福二郎を遣わす。

才作代の意味が不明。源作代の事だろうか。

伊能忠敬の天草測量総括？

御所浦島を最後に、天草測量を終えた伊能忠敬は、約10時間の船旅で、九州本土へ上陸した。

深夜であったので、船内で眠りに付いた忠敬ではあったが、寝入る前に、きっと天草測量について、あれやこれやの総括をしただろう。忠敬にしてみれば、天草測量は特別なことではなく一経過地に過ぎなかったが、きっと、他所とはちょっと違った印象を持ったのではないかと考える。勿論、測量日記には、何も記して無いので、そこは想像をたくましくして、忠敬になりかわり、総括をしてみたい。

① 人情について。

天草人は、とつとつとしているが、人情は素朴で細やかである。

②測量の協力体制について。

大多尾に着いたときは驚いた。何人もの大庄屋、庄屋連が出迎えてくれたからだ。役所から動員されたとは思うが、これほどの人数が、出迎えてくれたからには、サポート体制も万全だと感じた。

③サポートについて。

事実上、こちらの意図を先取りして、サポートをして貰い、測量もスムーズにできた。

天草は、他所に比べ貧しい地域という印象を受けたが、一汁一菜とは建前で、精一杯の馳走をしてもらった。それに対して、こちらが支払った食費や宿代は些少で、申し訳なかった。

漏れ聞くところによると、村から村高に応じて、測量に関する資金の拠出をして貰ったようだ。有難いことだ。また、数限りない人々の支援を受けた。天草は島が多く、測量も大変だったが、惜しみない協力に大変感謝している。

④上田宜珍氏は。

これまで多くの人のサポートを受けてきたが、彼ほど熱心に協力してくれた人は少なかった。さらに、識者であり、かつ知的好奇心も高く、測量術まで問うてきた。自分も名主をしてきたこともあり、文学にも興味があり、共通点も多く、二人でいるときは、話が尽きることがなかった。

⑤健康でよかった。

測量隊員や大庄屋庄屋連など、多くの人が病気になった。病気が一番困る。しかし、自分は幸いにして、病むこともなく、測量に励むことが出来た。

⑥最後に。

ここまで考えたところで、深い眠りに付いた。また、明日から新地で測量に励まねばならない。頑張ろう。

という筆者の忠敬に成り代わっての総括であった。

褒賞

上田宜珍の『御測量方御巡回日記』の最後に、褒賞が記されている。

覚

一　金弐百疋　平井為五郎
一　銀五両　酒井平太兵衛
一　金弐百疋　吉田長平
一　銀五両　大堂作右衛門
一　金弐百疋　上田源作
一　銀三両　小松彦右衛門
一　金百疋　脇山与一郎
一　銀三両　伊野又七郎
一　金百疋　大谷小十郎
一　銀五両　中村清右衛門
一　金百疋　鬼塚元右衛門
一　鳥目一貫五百文　竹四郎
一　鳥目一貫文　庄九郎
一　鳥目一貫文　利十

（文化八年）未閏二月富岡御役所江御呼出之上被下置候

去年此度測量方御廻村中廻昼夜致骨折候ニ付被下置く候段被仰渡候

翻刻版の(註)として、上田源作、酒井平太兵衛と共に苦労せし、深海村庄屋橋口嘉左衛門への褒賞書き入れなし。

恐らく記載洩れであろう。

と書かれているが。その通りだろう。額としては、上田源作と同額の金弐百疋であったものと思われる。また、上田宜珍と共に、薩摩に渡り伊能隊との打ち合わせから、９日目迄附廻りとして、勤めた久玉村大庄屋中原新吾の名前がない。これは、中原新吾が、褒賞の前年末に死去しているからである。

また、下働きの画工・宰領・料理人にもわずかとはいえ褒賞が与えられているのは評価したい。とかく、封建制社会にあっては、本人の能力や働きよりも、身分の上下が優先された時代であったため、一の働きをした高位の人に比べ、十の働きをした低位の人は、その評価も低くされていたからだ。

先にも述べたが、この三人の働きや彼らが感じたものなど、生の声を聴けたら、伊能忠敬の測量実態が、倍加するどころか千倍化もすると思うと残念だ。

ややこしい金銭単位と換算

ところで上田源作が下賜された金弐百匹とは、現在の価値に換算するとどのくらいになるのであろうか。

その前に、『上田宜珍傳』の年譜によると、次のように記されている。

文化八辛未（１８１１）年二月二十三日　前年伊能忠敬郡内測量の際同行して、諸事手落ちなく相働き、其の苦心少からざりし功労により、褒美として金二百匹賜る。（因みに当年より島原藩に於いても御差略に付き至って軽少の段承知すべきと当時賜りし辞令に付記す）

とある。つまり、本来ならもっと多く上げたいが、経費削減政策のため、我慢してくれとの事だろうか。もっとも、差略とは適当に取り計らう（新潮日本語漢字辞典）ということなので、合理化のためということだろうか。

ちなみに、享和三年（１８０３）に、富岡附山方役江間新吾右衛門が、勤行出精、百姓相続方取扱も行き届き、格別骨折格別とあって、褒美金五百疋を下賜される。（近代年譜）

とある。勿論、働きの程度を一概には比べられないが、宜珍贔屓は別としても、宜珍の忠敬案内の働きからして、その倍以上の褒賞価値はあるかもしれない。

さて、江戸時代は、時間にしてもそうだが、金銭の単位も複雑でよく理解できない。

複雑にしているのは、金の単位として、まず、金があり、銀があり、そして銭がある。

現在は、政府からの褒賞として、勲章はあるが、金銭の褒賞はない。しかし、江戸時代は、しばしば金銭の褒賞が行われている。意外にも、村では庄屋等の有力者が多いが、中には一般農民もある。

そして受賞する理由は様々で、『天草近代年譜』によると。

寛政六（１７９４）高浜村百姓貞蔵、母姉に孝心篤きの故を以て、島原藩主より褒賞せられ、鳥目三貫文を下賜される。

これらの例は結構多い。

さて、ウエブサイトの「古文書なび」によると、進物用の金銀の表示単位として、次のように書かれている。

金１分　＝「金百疋」
金２朱　＝「金五十疋」
金１朱　＝「金二十五疋」
銀４匁３分　＝「銀一両」
銀４３匁　＝「銀一枚」
銀１０貫　＝「銀一箱」
銀５００目　＝「銀一匁」

ということは、「金二百疋」とは、金２分。１両が４分なので、０・５両ということだろうか。

また、銀一両が銀４匁３分ということは、１匁は10分なので、43匁。したがって、銀五両とは、43×５で、銀２１５匁である。しかし、儀礼用でない銀貨の単位は、先の「古文書なび」によると、銀60匁を「銀一両」と呼んだとなっている。つまり、儀礼用は、実用的でない、単なる栄誉賞みたいなものだったのかもしれない。

竹四郎等が貰った、鳥目とは「銭」のこと。一貫５００匁は、銭１５００匁に当たるようである。この銭１５００匁の価値はどれくらいかというと、白米が約６升買えるくらいのようだ。

ともかく江戸時代の貨幣制度は、チンプンカンプンだが、これが通用していたのだから、これを理解して使っていた江戸人は、ある意味恐るべき時代人とも言えようか。

しかし、考えてみると、誠心誠意測量隊に奉仕した割には、僅かばかりの褒賞といえよう。

参考までに金貨、銀貨、銭の単位も記しておく。

□　金貨（計数貨幣）

1両　＝　4分
　　1分　＝　4朱
1両小判（基本貨）
2分金（2枚で1両）
1分金（基本貨　4枚で1両）
2朱金（8枚で1両）
1朱金（16枚で1両）

□銀貨（秤量貨幣、ただし5匁銀以下は計数貨幣）
1貫(貫目)＝1000匁
1匁＝10分
1分＝10厘
1厘＝10毛
丁銀・豆板銀（60匁で1両）
5匁銀（12枚で1両）
1分銀（4枚で1両）
2朱銀（8枚で1両）
1朱銀（16枚で1両）

□銭貨（計数貨幣）
1貫(貫文)＝永1000文
1貫＝100疋(匹)
1文銭100枚＝100文…
　調銭(丁銭・調目・丁百・長銭)
1文銭 96枚＝100文…
　省銭(省百・九六銭・九六百)
4貫文を「一両」と呼んだ。

地名について

この「測量記」や「巡廻日記」には、村名から字名、枝名まで多数の地名が書かれている。村名は、現在の地名と同じなので、天草人ならすぐに理解できる。しかし、字名以下になると、現在消えてしまった地名も多い。

筆者の手元に、地名辞典「角川日本地名大事典　熊本県」があるが、これには、各市町村、大字ごとに、小字名が載っている。天草の場合は、合併する以前の市町だ。

この小字地名と測量日記に書かれている地名を照合しても、現在の地名に載っていないのも多い。つまり、消え去った地名も多いようだ。もっとも、集落名の場合、地元の老人等詳しい人に聞くと、分かる場合もあるかもしれないが。

また、はっきり誤記のような場合もある。これは、先に述べたように、言葉の壁で、村人の地名を、忠敬が聞き間違ったのかもしれない。

人名について

「測量日記」には、人名も多く登場している。特に、九月十八日（10／16）、忠敬が大多尾村へと到着した日、大勢の大庄屋、庄屋が出迎えている。その人の名を全て記している。現在は、名刺があるが、当時も名刺に相当する名札があったようだ。

旅先で課業終了後、暮夜独り、受け取った名札を整理しながら、一日の経過を綴った・・・・・（測量日記解読）忠敬の作業。それは忠敬ならではの仕事である。某古物鑑定士の言葉歩借りれば『いい仕事をしてますね」ということだ。勿論、その記入を忠敬だけが行ったのではないだろうが、とにかく名前をいちいち書き留めていることに感心する。同じ日記でも、名前が登場するのと、しないのとではずいぶん質的に違いがある。

また、名前を見ると、ほとんどが○左衛門、○右衛門といった名前が多い。

そして、百姓身分にもかかわらず、大庄屋、庄屋は苗字を名乗っているが、これは、大庄屋は明和七年（１７７０）、庄屋は寛政八年（１７９６）に、苗字御免となっているためである。もちろん、それまで苗字がなかったのではなく、公式には名乗れなかった。「近代年譜」をみると、御免以前の場合は、○付きで書かれている。

この書の主役は、もちろん伊能忠敬と、上田宜珍だが、原文では、伊能勘解由、上田源作となっている。

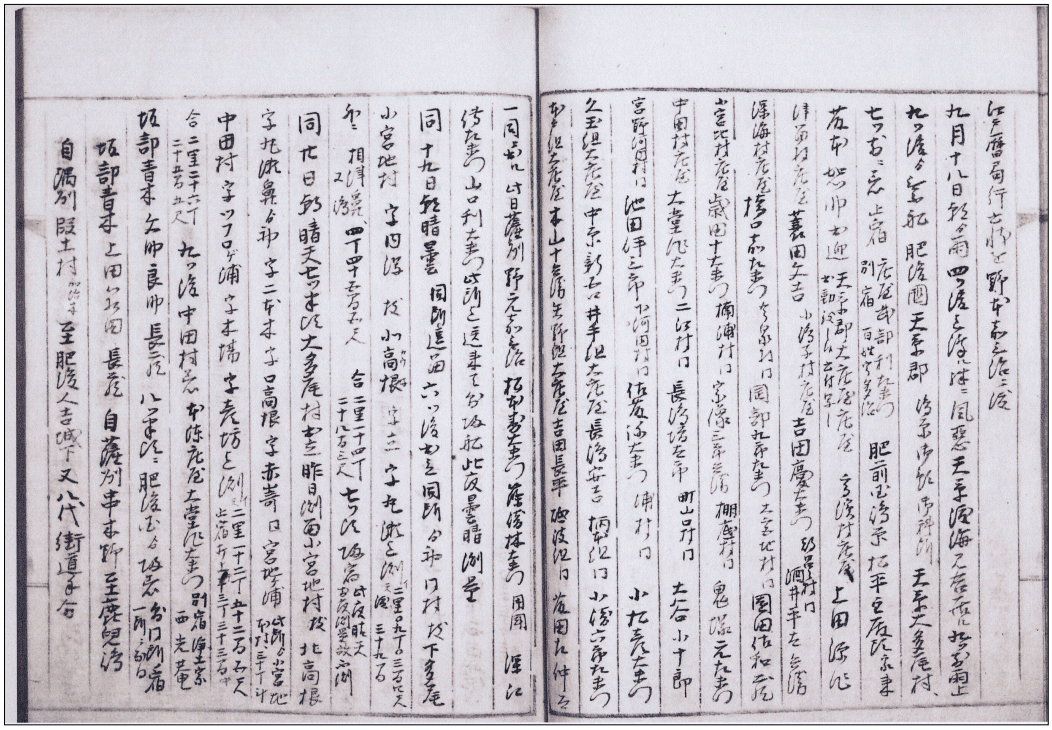
天草の地史

伊能忠敬の天草測量は、大多尾に始まり、御所浦で終わった。忠敬の作業は、目に見える大地（輿地）表面の測量であったが、天草のその地下、すなわち地層は、複雑なものである。天草の地層でもっとも古い岩石は、今から2億年以上前の古生代の海底で堆積した地層が、地殻変動でできたもので、1億1千年前のものだという。この地層が天草全体なら、そう対して広くない天草の事だから納得がいくが、各地各様に、様々な地層が存在する。

筆者はその道には疎いが、それでも、それを裏付ける狭い範囲で、独特の石等が産出されることからも分かる。

例えば、かつて天草は石炭の島であった。それもかなり質の高い品質を誇る石炭であった。その石炭も、天草全土に分布しているのではなく、天草下島の西海岸沿いに限られている。また、現在も産出されている陶石。これも、質の高さは日本一である。そして産出地域も天草下島西海岸

の一部に限られている。
御領石、下浦石、合津石など、加工に適した石も、極限られた地域でしか存在しない。
御所浦島では、恐竜の化石が発見された。
天草は火山とは縁がないように思われるが、あちこち結構火山地層が存在している。
話は、やや現在に近づくが、切支丹墓碑について。五和地区を中心に、多くのキリシタン古墓石が存在するが、隠れキリシタンの里大江等には、まずその墓石はない。何故かというと、その地の石は雲母質などで、墓石に適する石がないためと聞いた。
２０１６年４月の熊本地震で、天草では五和御領地区だけ被害があった。これも不思議だが、どうも地層が関係しているらしい。
このように、天草の地層は複雑怪奇。表面では一枚島のように見える天草島も、ちょっと地下を覗いてみると、寄せ細工のような地盤であることが分かる。
また、天草に何時頃から人が住み始めたか。さらにこの狭い島に多くの人が住みだし、かつ天草の乱で人口が減った分、さらに多くの人々が流入してきた。移民の島とも言える。
このように、大地にしても、住民にしても、異なるものが、相携えて存在する天草島。もっとも住民は、既に天草人として同一化しているが。
地質時代から歴史時代を経て、今日まで大戦（おおいくさ）や大災害等を乗り越え、営々と人々が喜怒哀楽暮らす天草島。
〝天草を知る〟事が、〝天草を好きになる〟事は間違いない。そのような歴史の中でも、天草の詳細精確地図を作った伊能忠敬に、敬意を表したい。



上　「伊能忠敬測量日記　原文」　伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会・ＤＶＤ
下　「伊能忠敬　測量日記解読　第十六巻」伊能忠敬ｅ史料館

九月十八日　朝より雨、四ツ後迄降る。殊に風悪天草渡海見合居る。九ツ前雨止、九ツ後より乗船。肥後国天草郡、島原御預御料所天草大多尾村へ七ツ前に着。止宿庄屋武部利左衛門。別宿百姓宇多治。肥前国島原松平主殿頭家来藤本恕助出迎。（天草郡の大庄屋、庄屋出勤致し候書付写し）高浜村庄屋上田源作、津留村庄屋蓑田文吉、小島子村庄屋吉田慶右衛門、都呂々村同酒井平太兵衛、深海村庄屋橋口嘉左衛門、今泉村同岡部九郎左衛門、大宮地村同園田佐和蔵、小宮地村庄屋蔵田十右衛門、楠浦村同宗像三郎兵衛、棚底村同鬼塚元左衛門、中田村庄屋大堂作右衛門、二江村同長島増太郎、町山口村同大谷小十郎、宮野河内村同池田伊三郎、下河内村同佐藤弥右衛門、浦村同小松彦右衛門、久玉組大庄屋中原新吾、井手組大庄屋長島安吉、柄本組同小崎六郎左衛門、本戸組大庄屋木山十兵衛、矢野組大庄屋吉田長平、砥波組同藤田左仲太、一同に出る。

此日、薩州野元嘉兵治、松本寿右衛門、篠崎林右衛門、用聞深江伝左衛門、山口利右衛門、此所迄送来て則帰船。此夜曇晴、測量。

九月十九日　朝晴曇。同所逗留。六ツ後出立。同所より初、同村枝下多尾、小宮地村、字内潟、枝北高根（カウテ）、字立、字丸瀬迄測（二里九町三間四尺。渡三十九間）。外に相津鼻（又島）四町四十五間五尺、合二里十四町二十八間三尺。七ツ頃帰宿。此夜晴天。前夜測量故、不測。

九月二十日　朝晴天。七ツ半頃大多尾村出立。昨日測留、小宮地村枝北高根字丸瀬鼻より初、字二本木、字高根、字赤崎、同宮池ケ浦（此所より小宮地本村へ三十町計）、中田村字ッフロゲ浦、字木場、字彦坊迄測（二里十二町五十二間五尺。止宿打上十三町三十三間。合二里二十六町二十五間五尺）。九ツ後中田村着。本陣庄屋大堂作右衛門。別宿浄土宗西光菴。坂部、青木、文助、良助、長蔵、八ツ半頃に肥後国より帰着。（則同所の宿一所になる）。

坂部、青木、上田、箱田、長蔵、自薩州串木野、至鹿児島、自隅州段土村（加治木）、至肥後人吉城下、又八代街道手分。